

そばには王子様が

「踊るぞ」

そう声をかけてきたのは王子様。

召使いとして蔑んだ視線で見られていたのに、目の前にいる人は真つ直ぐに自分を見てくれている。

その視線に引き込まれ、差し出された手に思わず手を重ねていた。

魔法にかけられた夢のような時間は、過ぎていくのも早い。

魔法使いのおばあさんの忠告を思い出したのは、時計の鐘が帰る時間を告げ出してから。

気をつけるんだよ。約束の時間が過ぎると、魔法が解けてしまうから――。

蜜柑は必死に数学のプリントを解いていた。

そのすぐ隣には既にプリントを解き終わった棗が座り、本を読んでいる。

ただその本も真剣に読んでいるわけではなく、ただ蜜柑の勉強に格好だけ合わせようとしてくれたらしい。

それでも手持ち無沙汰らしく、棗の左手は蜜柑のツインテールの片方を軽く引つ張つてみたり、くるくると指に巻いてみたりと、蜜柑の髪で遊んでいる。

蜜柑はちらりと棗を見た。

そんな風に髪で遊ばれていると、そつちが気になつてしまう。もう勉強が手に付かんやろ！

蜜柑がそう考えていると、蜜柑の視線に気づいた棗は「どうした。どの問題だ」とプリントをのぞき込んでくる。

「ちやうわーっ！ と内心叫びつつも、分からなくて困っていたことは事実だったので、「この問題なんやけど」と指さすと、棗はシャープペンシルを手に取り説明を始めた。

蜜柑の視界には、棗の端正な顔が映っている。

蜜柑の手元のノートに解法を書きながら説明してくれているので、とても顔が近い。

「ううう。そんなに顔近づくんというや。」

先ほど髪をいじられて時より、さらに数学なんて考えていられない。

初等部の頃からずつと隣にいたのに、今でも慣れない。

羊飼いとライオン

昔々のお話です。

一人の羊飼いが森の中を歩いていると、一匹のライオンに出会いました。

「うひゃっ！」

驚いた羊飼いは逃げようと思いました。食べられてしまつてはたまりません。

けれど、ライオンの様子が変わります。羊飼いを見ても、ライオンは動こうとはしません。

不思議に思った羊飼いが恐る恐る近づくと、どうやらライオンは片方の前足を気にしているようでした。

「ケガでもしてるん？」

ライオンがとても悲しそうで、放っておけなかつたので、

羊飼いはおつかかなびつくり、なおもライオンに近寄りました。

するとライオンは、羊飼いの方へ前足を差し出しました。見ればそこには大きなトゲが刺さっています。

「トゲが痛いんやな。治したるから、大人しくしとつてな」
羊飼いはトゲを抜いてあげ、持っていた自分の薬を塗り、包帯を巻いてあげました。

するとライオンは「ウオウ」と一声、感謝の言葉を言うかのように吠え、森の奥へと去っていきました。

*

棗は目の前の少女を睨んだ。

蜜柑との待ち合わせ場所にいた女。なぜここにいる。

棗と同じぐらいの年頃だろうが、彼女を見たことはない。

ふわふわの長い髪と、蜜柑より少し暗いぐらいの茶色の髪より少し濃い茶色の瞳は、釣り目できつく感じられる。

いや、目のせいだけではない。

全体的な印象がきつさを与える……、というか棗の前にしても全く物怖じせず、むしろ尊大さすら感じる。

その遠慮のない態度が棗の記憶をひっかけ、彼女に会ったのは初めてのはずなのに既視感がある。殿か翼か鳴海か、その類だ。

いや。

棗は眉間にしわを寄せた。

棗に向ける笑顔は完全に嘲りを含んでいる。

その似非笑顔に思い当たった。毎日のように同じような笑みを見ている。

今井蛭だ。

まさか親戚とかじゃねーだろうな。棗の家族のように一家全員アリスということも珍しくはないのだ。彼女の兄だつてアリスだ。いとこがアリスでも何の不思議もない。あいつの両親はアリスではなかったはずだが……。

その目の前の少女が微笑んだ。

「棗君、聞いている？」

「……」

「私、あなたのことが好きなの」

棗は無言のまま彼女を睨み続けた。

それは嘘だ。

棗のことを好きだと言う女のパターンは決まっている。

棗を前にして泣きそうになって小声でぼそぼそと話すか、その逆に完全に珍獣扱いで耳が痛くなるほどギャーギャー騒ぐか。

例外は、特別な一人だけだ。

「なつめ、すきや」

時に真剣に、或いは恥ずかしそうに小声で。歌うように

甘い声で。うれしそうにぎゅつと棗の腕にしがみつきなごら。熱が籠もった掠れ声で、棗を誘うように。

その時その時で、まるで違う。

何度言われても、初めて彼女がそう口にした時のようにうれしいし、愛おしく思う。

その大切な彼女との待ち合わせ場所に現れ、まるで喧嘩でも売るかのように好きだと言われても、まともに相手にする気にもならない。

彼女が何者なのか、何の意図があるのかは気になるが、相手にしている時間をもつたらない。

「佐倉蜜柑と別れて、私と付き合わない？」

そう続けた彼女に、棗は鼻先で笑った。

「冗談じゃねーよ。くだらねえ」

「くだらないってそんな……」

彼女は手を口元に当てた。その仕草も芝居がかっている。

「一体何を企んでる」

「何って、そうね、」

一際彼女の笑顔が深くなった。

棗は警戒した。

何だ。何のアリスだ。

とつさにアリス攻撃に備えて身構える。こういう場合、